

12. 赤潮貝毒監視事業 (毒化モニタリング)

赤潮貝毒監視事業報告書（要旨） （毒化モニタリング）

プランクトンが原因となって貝類が毒化する現象は、ホタテガイのみならず近年では西日本のヒオウギ、日本海のムラサキガイさらには一部肉食性巻貝類にも認められるなど、その多様化、広域化が進んでいる。

この事業では水産庁の補助を受けて、浦ノ内湾産アサリの毒化監視と毒化関連プランクトン調査を行った。

1. 調査の概要

平成2年2月から7月の間、浦ノ内湾の二定点でアサリ、ヒオウギについて麻痺性貝毒及び下痢性貝毒を計8回、総数10検体を検査した。また、毒化関連プランクトン出現数調査及び環境調査を実施した。

2. 調査結果の要約

- 1) 貝毒検査の結果、対象種であるアサリについては麻痺性貝毒、下痢性貝毒のいずれも検出されなかったが、指標種のヒオウギでは両毒とも検出された。
- 2) ヒオウギの麻痺性貝毒は6月に5.9 MU/g（中腸腺），下痢性貝毒は0.6 MU/g（中腸腺）が検出された。
- 3) 毒化関連プランクトンの調査では、Alexandrium属では2月～7月にわたって分布が認められており、その盛期は2月～5月で、水温は12.5～22.6℃の範囲で最多出現数は3月の18,540 cells/ℓであった。
- 4) Dinophysis属では、D. fortii, D. acuminata が出現した。しかしながら、その出現数は少なく、最高で30 cells/ℓにとどまった。